

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(5年計画の4年目)

1. 研究課題

ポスト=ヒューマン時代の起点としてのフランス象徴主義

French Symbolism as the Starting Point of the Post-human Era

2. 研究代表者氏名

森本 淳生

MORIMOTO, Atsuo

3. 研究期間

2021年4月-2026年3月(4年目)

4. 研究目的

19世紀を通じて大きな成長をとげた資本主義経済とテクノロジー、識字率の向上と出版・メディアの発展、第三共和政とともに決定的となった世俗化=脱キリスト教化は、社会と人々のメンタリティを決定的に規定すると同時に、こうした事態に対する批評意識を生み出した。フランス象徴主義はその端的な表現である。象徴主義者たちは、ブルジョア社会と産業資本主義に強い嫌悪感を示しているが、貨幣やテクノロジー、同時代の経済社会に対する考察は、その思索の本質的課題のひとつである。また、伝統的な信仰が成立しなくなった時代にあって「超越」との新たな関係が模索される。こうした社会や技術、宗教をめぐる省察を背景として、文学と芸術の新しい方式が、自由詩や内的独白をはじめとする様々な技法上の試みを通して追究されたが、そうした技法的変革も、自己の社会的規定性に対する批評意識によるものである以上、自己自身のあり方の変革を伴うものだった。詩人はたんに作品を書く人間ではなく、作品制作を通して自己の実存を変える者なのである。

現在、グローバル経済と金融資本主義が席卷し、新しいテクノロジーが社会を一変させているが、私たちはその恩恵を享受するとともに強い息苦しさを感じている。伝統的な信仰は瀕死の状態だが、原理主義や新興宗教が勢いをもち、他方で「世界の終焉」が強く感じられる中で、近代的な「人間」以後の生存のあり方が模索されてもいる。19世紀後半に象徴主義が取り組んだ問題は、今日、こうしたポスト=ヒューマン時代を生きる私たちが直面する課題に通じる。その「起点」として象徴主義を複眼的に捉え直し現代を理解する示唆を与えること、これが本研究の目的である。

The important factors in 19th century European development—capitalism and technology, literacy rates and publishing, secularization or de-Christianization made decisive with the advent of the Third Republic—not only determined the direction of modern society and

public thinking but also created a critical consciousness regarding that situation. French symbolism was its precise expression. Although the symbolists displayed hatred of bourgeois society and industrial capitalism, they regarded technology, finance and economics as essential themes of their reflection. And, in an age when traditional faith had lost its influence, they sought a new relationship with "transcendence." It is against this background concerning society, technology, and religion that symbolism pursued new modes of literature and the arts through various techniques, such as free verse and internal monologue. However, this technical revolution, because it resulted from a critical consciousness of the socially determined self, was inevitably accompanied by a revolution of the self; a poet is a person who not only writes a piece but changes his/her own existence through such production. Today, new technologies have radically changed the world, and the global economy, together with financial capitalism, dominate it. We enjoy their benefits but, at the same time, we feel greatly suffocated because of them. Although traditional faith is in its death throes, fundamentalisms and new cults are exerting growing influence. Feeling that "the end of the world" is near, we seek a new mode of existence which will come after the "human" in the modern sense. These problems we face in this post-human age share much with those that symbolism tackled in the second half of the 19th century. The purpose of this study is to reconsider symbolism from multiple perspectives as the "starting point" of the post-human era and to posit some suggestions that may allow us to understand our times.

5. 本年度の研究実施状況

令和6年度は研究報告会と訳読会を計14回開催した。報告会では昨年度にひきつづき、メンバーがそれぞれの研究テーマについて発表し知見の共有に努めた。具体的には、ヴェルレーヌ、シャルル・クロ、クローデル、モーパッサン、ミルボー、ゾラ、マラルメ、ラフォールグ、メーテルリンク、ランボー、バンヴィル、ブルトンなどの作家を考察の中心に据え、あわせて、フュミストリや小雑誌など文学メディアの問題、科学技術や貨幣経済、ドレフェス事件との関係、自由詩の問題、中世スコラ哲学における象徴主義などをテーマとして複眼的に象徴主義を分析した。また、Zoomによるフランク・ジャヴレ氏の講演会、人文研招聘研究者ジャン＝ニコラ・イルーズ教授の報告会も実施し、フランスの研究者との学術交流も行った。訳読会に関しては、ギルの詩集『最良の生成 (Le meilleur devenir)』の翻訳・註解を『人文学報』に発表し(同書はフランスでも註解がほとんど存在せず、翻訳されるのも(英訳等も含め)世界初の試みである)、レニエの『古のロマネスク詩集』の翻訳・註解を進めた。企画している象徴主義に関する「読む事典」についてはフランス人やアメリカ人の研究者にも寄稿を依頼し、水声社に刊行を引き受けてもらうなど、実現に向けて着実に前進した。

6. 本年度の研究実施内容

- 2024-05-11 「象徴主義研究」例会 (20) フュミストリー再考、サペックと世紀末文学、新聞メディア 発表者 岡本夢子 滋賀県立大学 詩人像の提示と受容:ヴェルレーヌはどう読まれる (べき) か 発表者 倉方健作 九州大学
- 2024-05-12 「象徴主義研究」例会 (21) シャルル・クロ研究の可能性 発表者 福田裕大 近畿大学 近年の象徴主義雑誌研究について 発表者 合田陽祐 山形大学
- 2024-06-15 「象徴主義研究」例会 (22) 司会 森本淳生 Relire et éditer Henri de Régnier au XX^e siècle. 発表者 Franck Javourez
- 2024-06-29 象徴主義文献の翻訳と註釈 (アンリ・ド・レニエ『古のロマネスクな詩』) (6) Le Salut à l'Étrangère, III et IV 発表者 藤野志織 発表者 熊谷謙介 神奈川大学
- 2024-07-20 「象徴主義研究」例会 (23) 宗教モデルニスムと文学モデルニスムのあいだで——ポール・クロードルの実在論 発表者 大出敦 慶應義塾大学 モーパッサン『水の上』、あるいは詩への回帰 発表者 足立和彦 名城大学
- 2024-07-21 「象徴主義研究」例会 (24) Octave Mirbeau : critique, romancier et anarchiste 発表者 山田広昭 東京大学名誉教授 エミール・ゾラと象徴主義、小説作品の象徴性 発表者 野田農 早稲田大学
- 2024-09-16 象徴主義文献の翻訳と註釈 (アンリ・ド・レニエ『古のロマネスクな詩』) (7) Le Salut à l'Étrangère, IV et V 発表者 藤野志織 発表者 熊谷謙介 神奈川大学
- 2024-10-12 「象徴主義研究」例会 (25) Mallarmé et le livre fétiche (Variations sur un sujet) 発表者 Jean-Nicolas Illouz Université Paris 8 L'âge de décomposition : le symbolisme et l'idéalisme matérialiste 司会 森本淳生
- 2024-10-13 「象徴主義研究」例会 (26) ドレフュス事件と象徴主義 発表者 村上祐二 文学研究科 性愛という「病」ーラフォルクを中心に 発表者 熊谷謙介 神奈川大学
- 2024-12-14 「象徴主義研究」例会 (27) メーテルランク再考 (2) ——ベルギー象徴主義芸術との関係性—— 発表者 坂巻康司 東北大学 フランス象徴詩の諸相ーラフォルク、カーン、レニエ、ヴィエレ＝グリファン 発表者 鳥山定嗣 文学研究科
- 2024-12-15 「象徴主義研究」例会 (28) マラルメにおける言語と貨幣 発表者 中畑寛之 神戸大学
- 2025-02-01 象徴主義文献の翻訳と註釈 (アンリ・ド・レニエ『古のロマネスクな詩』) (8) Le Songe de la Forêt 序 発表者 合田陽祐 山形大学 発表者 村上由美 慶應義塾大学
- 2025-03-02 「象徴主義研究」例会 (29) スコラ哲学における象徴主義の系譜 発表者 山内

志朗 慶應義塾大学名誉教授 ボードレールにおけるダイナミズム ― 詩学、モラル、社会そして歴史 ― 発表者 海老根龍介 白百合女子大学

2025-03-03 「象徴主義研究」例会 (30) バンヴィルとランボーにおける道化的形象 発表者 浜永和希 東京大学 『ナジャ』における象徴主義の終焉 発表者 藤野志織 人文科学研究所

7. 共同研究会に関連した公表実績

「ルネ・ギル『最良の生成』(René Ghil, Le Meilleur devenir, 1889) ――翻訳と註解の試み――」(鳥山定嗣と共同監修、京都大学人文科学研究所「ポスト=ヒューマン時代の起点としてのフランス象徴主義」班訳)、『人文学報』、第 122 号、京都大学人文科学研究所、2024 年、p. 549-675。

8. 研究班員

所内

森本淳生、菅原百合絵、藤野志織

学内

村上祐二(文学研究科)、鳥山定嗣(文学研究科)、中筋朋(人間・環境学研究科)、上田泰史(人間・環境学研究科)、椎名隆一(文学研究科博士後期課程)、西村真悟(文学研究科博士後期課程)、藤貫裕

学外

合田陽祐(山形大学社会文化システム研究科)、西村友樹雄(一橋大学言語社会研究科)、山田広昭(東京大学大学院総合文化研究科)、橋本知子(千葉大学大学院人文科学研究院)、坂巻康司(東北大学大学院国際文化研究科)、中野知律(一橋大学社会学研究科)、中畑寛之(神戸大学人文学研究科)、倉方健作(九州大学言語文化研究院)、浜永和希(東京大学大学院人文社会系研究科)、中田峻太郎(東京大学大学院総合文化研究科博士後期課程)、岡本夢子(滋賀県立大学人間文化学部)、辻昌子(大阪公立大学大学院文学研究科都市文化研究センター)、野田農(早稲田大学創造理工学部)、福田裕大(近畿大学国際学部)、熊谷謙介(神奈川大学国際日本学部)、久保昭博(関西学院大学文学部)、足立和彦(名城大学法学部法学科)、松浦菜美子(関西学院大学文学部)、大出敦(慶應義塾大学法学部)、立花史(早稲田大学)、学谷亮(中央大学文学部)、黒木朋興(上智大学)、松村悠子(早稲田大学)、海老根龍介(白百合女子大学)、原大地(慶應義塾大学)、根岸徹郎(専修大学 国際コミュニケーション学部)、浅間哲平(明治大学商学部)、渡辺惟央(慶應義塾大学文学部)、袴田紘代(西洋美術館)、フォコニエ、ブリス

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
人文研所属 (内女性)	1	5 (2)	1 (0)	0 (0)	3 (2)	0 (0)	43 (26)	1 (0)	0 (0)	29 (26)	0 (0)
京大内 (人文研を除く) (内女性)	2	7 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (0)	35 (3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	14 (0)
国立大学 (内女性)	7	11 (3)	0 (0)	3 (0)	0 (0)	1 (1)	59 (20)	0 (0)	19 (0)	0 (0)	1 (1)
公立大学 (内女性)	2	2 (2)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	9 (9)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)
私立大学 (内女性)	11	19 (3)	0 (0)	3 (1)	0 (0)	0 (0)	98 (22)	0 (0)	27 (11)	0 (0)	0 (0)
大学共同利用機関法人 (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
独立行政法人等公的研究機関 (内女性)	1	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
民間機関 (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
外国機関 (内女性)	0	1 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
その他 ※ (内女性)	0	5 (2)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	15 (2)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)
計	24	51 (14)	2 (0)	7 (2)	3 (2)	5 (2)	264 (86)	2 (0)	47 (12)	29 (26)	16 (2)
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例) 高校教員 無所属の場合は機関数 0 とカウントし、この欄の記載不要											

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	1		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	1	(0)	0	(0)
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

	雑誌名	掲載論文数	掲載年月	論文名	発表者名
1	La Revue des Lettres modernes	1	2024.5	D'Olympio au "voleur de feu". L'héritage littéraire du romantisme dans la lettre du 15 mai 1871	浜永和希
2	人文學報	1	2024.6	ルネ・ギル『最良の生成』(René Ghil, Le Meilleur devenir, 1889) -- 翻訳と註解の試み--	森本淳生・鳥山定嗣(監修)
3	人文學報	1	2024.6	新聞連載小説として読み直すアルフレッド・ジャリの『訪問する愛』	合田陽祐
4	人文學報	1	2024.6	九鬼周造の押韻論におけるポール・ヴァレリーと歌論 ―「純粹詩」を手掛かりに―	藤貫裕
5	仏蘭西学研究	1	2024.6	大正期前半のポール・クロードル受容	学谷亮

6	フランス語フランス文学研究	1	2024.8	Mère et fils dans Mémoire de Rimbaud	浜永和希
7	人文研究	1	2024.12	感覚過敏から精神の麻痺へーユイスマンス『仮泊にて』分析（神経文学論（3））	熊谷謙介
8	Stella	1	2024.12	ポール・クロードルの伊香保旅行：『峨眉山の老人』を読むために	学谷亮
9	Stella	1	2024.12	エミール・ゾラと象徴主義ーセザンヌ、マラルメとの書簡から	野田農
10	Nord-Est	1	2025.2	出版メディアとしてみるコレージュ・ド・パタフィジック初期におけるジャリの受容と活用をめぐって	合田陽祐
11	教養論叢	1	2025.3	クロードルは存在したか	大出敦
12	教養論叢	1	2025.3	La critique de danse avant Mallarmé : autour de la lecture de « Crayonné au théâtre »	村上由美
13	Valéry au Collège de France	1	2025.3	Le cycle sensorimoteur, l'implexe et la création poétique	森本淳生

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

	研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名	国際共著
1	ロックと悪魔	黒木朋興	2024.11	春秋社	
2	余白の形而上学：ポール・クロードルと日本思想	大出敦	2025.3	水声社	

12. 博士学位を取得した学生の数

なし

13. 次年度の研究実施計画

最終年度を迎える令和7年度はこれまで発表をしていないメンバーや「読む事典」に寄稿を求めた研究者（ゲスト・スピーカー）の報告を中心に研究会を行う。フランスの代表的な研究者（ギ・デュクレ教授）の講演会も予定している。訳読会は当時の代表的詩人であっ

たアンリ・ド・レニエの『古のロマネスク詩集』の翻訳と註解をひきつづき進めていく。レニエの散文は比較的翻訳があるが、詩の受容はきわめて限定的であり、この作業によって日本における彼の詩の理解が進むことが期待される。「読む事典」については随時提出される原稿をチェックし、完成に向けた問題点の洗い出しを行う。

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

令和7年度に刊行できる成果の予定はないが、レニエの『古のロマネスク詩集』はギルと同様、『人文学報』に翻訳と註解を発表できるよう、着実に作業を進めていく。「読む事典」の編集作業を進めるとともに、『人文学報』特集号（令和9年度）として成果論文集を予定しているので、これに関しても準備を進める。